



私の3冊

桑山浩明

後輩に薦める 2 冊

斎藤清二（著）

医療におけるナラティブとエビデンス 改訂版—対立から調和へ
遠見書房，2016 年発行

介護保険法が始まった年に入職し、医療現場でも成果主義やエビデンスの重要性が語られる時代に、後述の通り、終末期や在宅分野にかかわるなかで、なかなか馴染めないものがありました。この本の表題にあるように、エビデンスとナラティブは、相対するものではなく調和し、目の前の対象者にかかわることが記載されています。医療者としてのプライドと人に寄り添っているという思いを調和しながら、日々の臨床にかかわってほしいと思います。

森田達也，白土明美（著）

死亡直前と看取りのエビデンス 医学書院，2015 年発行

終末期を主としてかかわっている際、目の前で、身体能力の著しく低下していく対象者になすべくなく、自分が何をすべきかを悩むことがありました。そんななか、死に行く過程や看取りの事象がまとめられており、自分が体験する事象をどう捉えるか、どう考えるべきかの指標となります。これから、高齢多死社会となり、ますます私たちは、「死」に触れることが多くなると思います。対象者の「今」に目を向けて、やるべきことを考えて実践していく必要があるでしょう。

自分の 1 冊

六車由実（著）

《シリーズ ケアをひらく》 **驚きの介護民俗学** 医学書院，2012 年発行

社会学を研究している従兄弟より紹介された本です。従兄弟とは、道が違っても行きつく先は一緒と感じ、お互いに祖父の死からそれぞれの道に進んだことに気が付きました。在宅や終末期の場面では、人の多様性に多く出会い、そのたびにどうすべきかと悩まされます。その時にふと違う視点から見ることで、自分の心のなかでふっと、納得のいく事象として捉えられることが増えてきます。今でも臨床の現場で、その多様性に触れながら、人と接し、人としての自分と寄り添うことができると感じています。

■くわやま・ひろあき 理学療法士 12 年目 社会医療法人中央会介護老人保健施設ローランド

血液内科を主としている一般病院に入職し、入職当時から入院だけに限らず在宅での臨床をするなか、終末期の患者にかかわっていた。そのころ、血液疾患のリハビリテーションや在宅でのリハビリテーションもあまり多くなく、学生時代に学んでこなかった事象が目の前に現れるたびに、理学療法士としての自分に思い悩むことが多くあった。紹介する 3 冊は、理学療法士としての自分、リハビリテーションにかかわる自分、人としての自分に気づかされる本であり、思い悩んだ時にふとこれまでの自分を振り返らせてくれる。